

いのちと地域を守る

将来の夢 1期生に聞く

多賀城高災害科学科の1期生はどんな思いで日々学び、将来何を目標しているのか。生徒の声を聞いた。

気仙沼に戻りまちづくり

阿部大和さん(16)＝気仙沼市小泉中出身
気仙沼市本吉町出身で多賀城市内に下宿しています。実家は高台にあり震災の津波は免れましたが、クラスの半数以上が家を流されました。災害とどう折り合って生活すべきか考えさせられ、中学の先生の勧めも受けて入学しました。



く、他では学べない内容が豊富で充実感があります。宮城県図書館の方によるデジタルアーカイブ活用の授業が興味深かったです。卒業後は大学に進学して都市計画を学びたい。将来は気仙沼市に戻り、公務員としてまちづくりに関わりたいと思っています。

元気与えられる隊員目標

鈴木結依さん(15)＝多賀城中出身
中学校では習うことのなかった分野の学習がたくさんあり、みんなが積極的に取り組む姿に刺激を受けています。震災では石巻市の祖母の家が流され、両親とがれきの片付けを手伝いました。当時は小学4年。津波の怖さや支援してくれる人のありがたさを痛感しました。



災害対策の大切さを考え、入学を決めました。将来は自衛隊に入りたいと思っています。災害時に困っている人を元気づけられる隊員になりたい。吹奏楽部でトロンボーンを続けており、音楽隊で活動するのが目標です。

多賀城高「災害科学科」今春スタート



模型を使った授業で、地震の揺れについて学ぶ生徒ら＝5月25日、多賀城市の多賀城高

Table with 2 columns: 科目名 (Subject Name) and 内容 (Content). Subjects include Social Science, Natural Science, Applied Statistics, and English.

大学・企業と連携 実践重視

佐々木教頭は、さまざまな学習を経て、次は自分たちで課題を見つけていくというステップになる。3年次には、互いに発表して助言し合うゼミ形式の授業の導入も検討したいと話す。

最先端防災学習 38人挑む

多賀城市の多賀城高に今春、東北初の防災系専門学科「災害科学科」が新設され、1期生38人が入学した。東日本大震災の教訓を基に、防災分野で活躍できる人材を育成するのが狙い。

考える

「君たちはどっちな家に住みたい？」

5月下旬、災害科学科で行われた専門科目「社会と災害」の授業。講師の問いに、生徒らは紙でできた二つの家の模型をのぞき込む。家の下に敷かれた「地震」は、炊いたコメを固めたもの。

伝える

大船渡市のネイルサロン経営者及川由子さん(41)は、海沿いにある店に営業中、地震に遭った。1960年のチリ地震津波を経験した父の教えをよぎりに思い出し、子どもを連れて車で避難した。店は津波で流失。素早い行動で命拾った。



及川由子さん

病気の娘を車に乗せて避難 (大船渡市)



東日本大震災の発生当時、大船渡市の海岸から約100m先の所に店を構えていた。あの日は当時3歳だった次女(8)に熱があったため、店の奥に寝かせて看病しながら営業してました。

父の教え 決断後押し



店が入っていた建物は津波で流れ、基盤が傾いた。2011年3月、及川さん提供

時間がありません。娘を後部座席に乗せて車で避難を始めました。市の防災無線で「大津波警報」が出ていることを知り、ほかの2人の子どもの心配になり、避難の途中、大船渡小で当時7歳だった長女(13)を抱き、車に乗せました。

探る

岩手大名譽教授 斎藤 徳美さん



さいとう・とくみ 東北大学名誉教授・理学博士。岩手大教授や向大理事・副学長を歴任。岩手県の火山活動に関する研究で、同県東北大学名誉教授、同県東北大学災害対策推進委員会の会長など専門委員長などを務める。専門は地盤防災工学。秋田県出身。71歳。

起こりうる「想定外」

正しい知見発信責務

地球科学(地学)に関する研究者が、研究の対象となる自然災害の現場に立ち会う機会はそう多くない。40年余の大学人生を2回、岩手県の未知の活断層に遭遇できたのは、地学研究者の運かそれとも偶然か、と言えない。

8日、岩手県内陸北部の地震で出現した篠崎断層。おらず、2回とも「想定外」の北方への延長部と分か。国内では約2000の活断層が知られているが、地表面で発見できていない活断層はそれよりも多いと推測される。揺れば出てくる活断層。ではいかんかと危惧せざるを得ない。

4月の熊本地震は、国が主要活断層として長期評価していた日奈久断層帯と田川断層帯が活動して起きた。しかし、熊本県から大分県まで、距離の離れた複数の断層帯で地震が誘発されたのは過去に経験がないことだった(日奈久と田川を一連の断層帯とする説もある)。

自然に対する畏怖と敬意の念を捨て、これから先の子孫に安全な環境を引き継ぐ「未来責任」を私たちが一人一人が負っている。間、社会、自然の理解を深めるため、地学研究者の役割は小さくない。

生徒自ら考え判断力養う

宮城県富谷町成田中教諭・防災主任

藤村 崇さん(41)
総合学習の一環として、PTAをはじめ、町内会や福祉施設、事業所などと一緒に総合防災に取り組んでいます。昨年、年1回のペースで始めた「地域との防災活動体験」は、生徒約580人に加え、地域の方々も入って800人規模で実施しています。



に大人が口を出すのは最小限にしていきます。東日本大震災の発生時は名取市関上中の教諭でした。経験が役に立ってと昨年秋に震災語り部を始めました。いろいろな人に助けられて今があるので、できる限りのことをして恩返しをしたいです。

現場から

災害時の情報発信を強化

五所川原エフエム業務部長 須郷寛世さん(42)

五所川原エフエムは、2014年7月に開局したばかりの五所川原市内のコミュニティーFMです。災害発生時は市の臨時災害放送局に切り替わります。現在、



市との防災協定締結に向けて、切り替え後の具体的な運用方法を話し合っています。今年4月には電波が届かなかった市浦地区に中継局を開局し、日本海で津波が発生した場合にも対応できるようにしました。科学は進歩するので、防災にゴールはありません。災害時に市民が必要とする情報を届けるため、防災への取り組みをよりよいものに更新し続けていきます。